

# Book Review



## フッ化物をめぐる 誤解を解くための 12 章

眞木吉信 編



Reviewer

西 眞紀子 Makiko Nishi

(アイルランド・コーク大学

NPO 法人最先端のむし歯・歯周病予防を要求する会)

フッ化物ほど圧倒的な科学的エビデンスによって高い齲蝕予防効果を示されているものはない。歯科医師としては、人々の口腔健康のために適切な濃度の使用に議論の余地がないだろう。それにもかかわらず、いまだに根強い反対論に遭遇するのはなぜだろうか。

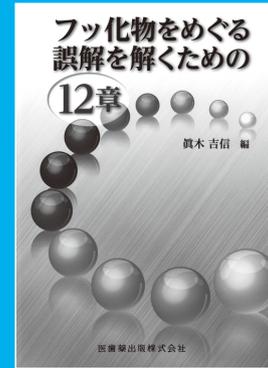
ここに紹介したい単行本『フッ化物をめぐる誤解を解くための 12 章』の発行のきっかけは、2011 年に日本弁護士連合会（日弁連）から提出された意見書だったが、こういう信頼性がありそうな団体からでも（意見書は日弁連の見解を示すわけではないが）フッ化物への反論が起こるようだ。フロリダ州を 1960 年代から法制化しているアイルランドでも、今年の *Irish Medical Time*, 48(2) に「フロリダ州が癌の高発症率の理由では？」と題して医師の寄稿があった。これらの反対派の論理は一般人に対してインパクトをもち、そのたびに混乱を引き起こしている。

それに対してフッ素擁護派も、このインパクトに対抗しようと声高に、や

かもすると相手に対して感情的な反論をしがちだと思う。そのような場に居合わせた経験があるが、残念ながら擁護派に対しても一歩引いてしまった。力が入りすぎると一般の人も同様な感覚をもつのではないだろうか。

しかし、10 年ほど前のアイルランド下院で緑の党（フロリダ州反対）に対してフッ化物の安全性を回答した Denis O'Mullane 教授の姿勢は印象的だった。感情的な緑の党の議員に対して、冷静かつ相手への軽蔑など感じられず、淡々と科学的エビデンスを述べたまさしく科学者としての自信を垣間見る姿勢だった。この姿勢こそが説得力をもつと思ったものである。

そういう科学的な姿勢のために便利な最新の必携書として本書を推薦したい。データが豊富で、欲しいと思っているものが網羅されているからである。そして、一般からのよくある疑問と著者らの見解を合わせて 12 の疑問としてまとめ、それぞれに対する回答を簡潔に示してくれている。1 つの疑問に対して約 5 ページと極力抑えら



A5 判, 78 頁  
定価 (本体 2,400 円+税)  
医歯薬出版刊

れているために読みやすい。前出の O'Mullane 教授にもお見せすると、英語の参考文献リストを見て頷いておられた。フッ化物の専門家が選ぶ適切な科学的エビデンスが用いられているのだろう。

最終章は、フッ化物を「栄養」としてみなすという一歩進んだ提言をしている。それによって日常的に飲食する水・サプリメント・菓子などのフッ化物添加を促進できる。そう言われてみると、歯科予防先進国の北欧ではこのような考え方が自然に定着していると感じる。ペットボトル水には 1 ppm のフッ素が添加されているのが普通で、チューイングガム・キャンディ・錠剤などさまざまな形で手軽に購入できる。

以上、海外での経験などを振り返り、これだけ必要性や安全性が確立されているフッ化物についての不毛な議論を終わらせる早道は、本書の資料を参考に、やはり冷静な科学的姿勢で挑むことではないかと考える。